CRT 栃木放送『開倫塾の時間』	2022 年 10 月 8 日(土)放送内容資料

文章のみがき方を考える

辰濃和男著『文章のみがき方』岩波新書、岩波書店 2007 年 10 月 9 日刊を読む

開倫塾
塾長　林明夫

今回の CRT ラジオ栃木放送「開倫塾の時間」では、皆様とご一緒に、「文章のみがき方」を考えます。参考にしたのは、辰濃和男さんの「文章のみがき方」という岩波新書です。辰濃さんは、朝日新聞の論説委員で、朝日新聞の最初のページ・一面にある「天声人語」という「コラム」を、13 年間お書きになった方です。素晴らしい内容です。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

１．＜はじめに＞

（１）＜いい文章の一番の条件＞は、

①「これを書きたい、これを伝えたいという、書き手の心の、静かな炎のようなもの」

②「大切なのは、**書きたいこと、伝えたいことを、はっきり心でつかむこと**」

（２）「技巧も大切だが、より大切なのは、**『心のままの誠』**」「**『誠』には、相手をとことん思いやる心という意味も**」「**ふるさとを切に恋う心があれば、それは、その人にとっての誠**」

（３）「**文は心である**」

①「自分の文章に向き合い、自分の文章の拙さ、思いの浅さに、のたうちまわって、くやむ」

②「『いい文章』を書くための道は、果てしないが、続いている」

③「そして、その道を地道に歩きつづけるものだけが、それなりの果実を手にすることができる」

２．「**基本的なことを、いくつか**」

（１）「**毎日書く**」

①「毎日、何かを書く」

②「毎日、たゆまずに書く」

③「毎日の素振りをせず、いくら野球の解説書を読んでも野球がうまくなるはずはありません。日記は、野球でいう素振りでしょう」

（２）「**書き抜く**」

①「書き抜くことで、その著者からより深く学ぶことができる」

②「自分の文章の劣った点、たとえば、紋切型を使いすぎるといったことを学ぶことができる」

③「自分がどういう文章を『いい文章』だと思ってきたか、のちに自分の心の歴史をたどることができる」

（３）「**繰り返し読む**」

①「多くの本を読むこと、そしてこれはと思う本があったら精読しよう」
②「書き抜く。傍線を引く。感想を書く。要約を書く」
③「あらゆる形で、その本と対話し、格闘し、感謝し、座右において、また、繰り返し読む」
○「その本のなかに、『いいな』と思った文章があったら、繰り返し音読する。そういう本をあなたは何冊もっていますか」
○「その本を好きになる努力をすること」(村上春樹)その人の書いたものを正当に評価しようと努力すること

（４）「**乱読を楽しむ**」
①「異質の本を読むことで自分の世界を広げることができます」
②「未知の世界に出会うことで、脳の働きに刺激を与えることができます」
③「アタマが極度に疲れたときは、新聞、週刊誌、写真集、画集など、周辺にあるものを手当たり次第に読むのが意外にたのしい。もやもやを突き破る一つの方法」

（５）「**歩く**」
①「歩くことは世の中の新しいにおい、時代の空気を教えてくれる。歩くことで、なまなましい現実の姿を目にし、耳にし、文章を書く素材を得ることができます」
②「書くことに苦しんでいるとき、歩くことでアタマがすっきりとし、机の前に戻ったとき、筆がなめらかに動くことがあります」
③「アタマをカラッポにして歩いていると、これはという思いつきがふと浮かぶことがあります」

（６）「現場感覚を楽しむ」
（７）「小さな発見を楽しむ」

３．「**さあ、書こう！！**」

（１）「**辞書を手元に置く**」
①「作文教室に辞書を持たずにいらっしゃるというのは、大胆不敵というか、関ヶ原の合戦に槍や刀を全部置いて丸腰で駆けつけるようなものです」
②岩手県一関市で行われた作文教室での作家、井上ひさし氏の発言です

（２）「**肩の力を抜く**」
①「書きやすいやり方で書けばよい」
②「ふだん着のままで、肩に力を入れない状態で書いてみたらどうか」
③「なにげないおしゃべりをそのまま書き留めればいいんだ」
④「起こったことは起こったことなんだから、それを感じるとおり感じればいいんだ」
⑤「文章を気楽に書き始めること」「毎日、とにかく何かを書く」

（３）「**書きたいことを書く**」
①「手紙でもいい、日記でもいい、書いて言葉が止まらなくなるときは、ためらうことなく、書きつくすこと」
②「だれかに見せる場合でも、だれかに見せない場合でも書いて書いて書きなぐること」
③「そこに文章修行の一つの道があります」

（４）「**正直に、飾りげなしに書く**」

①「見識とは、深く考え、深く修め、深く読んで形づくられていくものだ」（漱石）、
②「人生経験を積み、あらゆることをよく考え、たくさんの本を読む」
③「そういう道をきちんと歩んでゆけば、思想も深くなり、いい文章が書けるようになる」
④「あくまでもすなおに、正直に書くことからはじめよう」
⑤「大切なのは、『解釈』だ。自分を解釈する、人を解釈する、天地を解釈する、その解釈する力が他の人と違っていれば、そして、他の人の解釈よりも深ければ、すぐれた文章が生まれる可能性がある」

（５）「**借りものでない言葉で書く**」
①自分にしか書けないことを
②自分の感覚、心でとらえ
③借りものでない自分の言葉で
④だれにでもわかる文章で書く
⑤そのためには、まず、身近な人、自分がいちばん興味をもっていることなどを書くことで練習を積む

（６）「**異質なものを結びつける**」
①自分の思いをどうすれば人びとにわかってもらえるか
②そのための一つの手段として、異質のものをどうやって結びつけるかということに心を砕く
③つまり、ＡとＸ合体の術を身に着ける

（７）「**自慢話は書かない**」
①自慢話よりも失敗談を
②わたしたちの多くは、海に身を投げた平知盛や、北海道で戦死した新選組の土方にひかれ
③チャップリンの失恋話や、落語の熊さんのおっちょこちょいに親しみを感じる習性があるようです

（８）「**わかりやすく書く**」
①文章とはこれだけはどうしても伝えたい、あなたの胸に刻みたいという切なる思い
②どうしてもわかってもらいたいという切なる思い
③いい文章はわかりやすい。名文といわれるものでわかりづらい文章など、ひとつもない

（９）「**単純・簡素に書く**」
①読む人に、いちばん何を伝えたいかを明確にする
②自分が思っていること、自分が感じていることの正体をしっかりと掴む
③その上で、それをどう伝えたらわかってもらえるかを考える

(10)「**具体性を大切にして書く**」
①些細なこと、微小なことをいい加減にしない
②具体的なことをしかと見つめ、感じ、ゆるがせにしない
③そういう確かなことの積み重ねこそが大切だ
④その積み重ねが土台になって、はじめて、一つの抽象が説得力をもつのだ

(11)「**正確に書く**」
①辞書を引き、注意深く書くことに心掛ける

②先入観、固定概念、思い込み、偏見などによる間違いを避け、正確な文章を書く

③人の心の奥にある複雑なものを複雑なまま見極める努力をすること

(12)「**ゆとりをもつ**」

①「ゆとり」とはイギリスの「ユーモア」日本の「落語」

②「ユーモア」は、人間をいつくしむことを知る

③「落語」は、人間の本性を突き放して見ており、しかもそれを笑いにもっていく

(13)「**抑(おさ)える**」

①俳句の世界では、「情」を作品の背後に隠す(抑える)練習が要請されるのである

②相手に、自分の思いをきちんと伝えたいのであれば、激しい感情のたかぶりを抑えること

③抑えることによって文章の力は失せるのではなく、かえって力が加わる

４.「**推敲する**」

（１）「**書き直す**」

①一読して主題がはっきり浮び上る

②文章がこころよく流れる

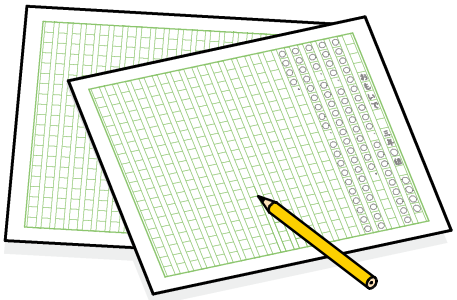
③ひき込まれて読む

④読み上げたとき相手がすんなりと理解できる

⑤書き出しで人を引きつける

⑥過剰表現、湿りけがないか

⑦内容もり込みすぎ、内容うすすぎがないか



⑧結びの文章

⑨長すぎたら２つに分ける

⑩改行を多くする、段落を多くする

⑪漢字が多すぎない

⑫言葉の順序

⑬文末が同じ表現は…

⑭同じことばが何回も出てきては…

⑮紋切型の表現は…

⑯難しい専門用語をそのまま使っては…

⑰日本語で表現できるのに外来語を使っては…

⑱字の間違い、数字の間違いは…

⑲引用文の間違いは…

⑳孫引きは危ない。原典に当ること

（２）「**削る**」

（３）「**紋切型を避ける**」

（４）「**いやな言葉は使わない**」

（５）「**比喩の工夫をする**」

①直喩…あるものを他のものにたとえる表現法

＜例＞「雪のようだ」「動かざること山のごとし」など

②隠喩…「～のようだ」「～のごとし」など、形を用いずそのものの特徴を直接他のもので表現する方法

＜例＞「花のかんばせ」「金は力なり」の類

③活喩法(擬人法)…人でないものを人に見立てて表現する方法

＜例＞「海は招く」の類

（６）「**外来語の乱用を避ける**」

①十分日本語で表現できるときは、外来語をつかわない

②どうしても使う必要があるときは、日本語の言い換えを併記する

（７）「**文末に気を配る**」…「新おしゃべり体」も

（８）「**流れを大切にする**」

①平明そして明晰であること

②こころよいリズムがあること

③いきいきとしていること

④主題がはっきりしていること

５．「**文章修行のために**」

（１）「**落語に学ぶ**」

①自分のおろかさをおおいに笑いとばす精神を学ぶ

②人々のおろかさ、けなげさ、悪質さを笑いながら、浮世のならいを知る

③そらそうなことや自慢話を書いたとき、ナンチャッテと省る余裕がでてくる

④落語に出てくる平易なことばを学ぶ

（２）「**土地の言葉を大切にする**」

（３）「**感受性を深める**」

（４）「**概念を壊す**」

（５）「**動詞を中心にする**」

（６）「**低い視線で書く**」

（７）「**自分と向き合う**」

（８）「**そっけなさを考える**」

（９）「**思いの深さを大切にする**」

○「思いの深さと踊りの深さとはつながっています」(琉球舞踊の名手、佐藤太圭子)

(10)「**渾身の力で取り組む**」

○そして、肩の力を抜いて書く

［コメント］

名著 辰濃和男著「文章の書き方」(岩波新書)の「続編」。１つ１つの教えが身に染みる。「正編」とともに「文章修業」の「テキスト・教科書」として最適。

2022 年 10 月 6 日記